



## 芸術と教育（その五）：レーニンの思想から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 広川, 正治 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00001844">https://doi.org/10.32150/00001844</a>

# 芸術と教育(その五)

— レーニンの思想から —

広 川 正 治

北海道教育大学函館分校教育学研究室

Shoji HIROKAWA : Some Thoughts of Lenin's on  
Art and Education. —Art and Education, No. 5.—

## 目 次

- |                  |                     |
|------------------|---------------------|
| 1. 認識論=反映論       | 5. 教育の階級性・党派性       |
| 2. 反映論にもとづく教育の問題 | 6. 文化の民族的性格に関する問題   |
| 3. 反映論にもとづく芸術の問題 | 7. 共産主義的教育と芸術のリアリズム |
| 4. 芸術の階級性・党派性    |                     |

ヴェ・イ・レーニンの芸術と教育とに関する考え方を検討してみよう。

「物質的生活の生産様式が、社会的・政治的および精神的生活過程一般を制約する」(「経済学批判」序言)というマルクス・エンゲルスの唯物史観の上に立って、レーニンはさらに彼の時代、すなわち資本主義体制の崩壊とプロレタリア革命の勝利の行進が始った時代、ロシアにおける社会主義建設の時代をふまえて、芸術や教育を含む文化全般についての問題を発展的に考察することができた。芸術は芸術の、教育は教育の、それぞれ独自の発展法則をもつと考えながらも、しかしそれらの特殊法則から出発するだけでは、それらを正しく理解することができない。つねに政治・経済および社会全般との全体的関連性のなかにおいてこそ、それらを正しく理解することができるであろう。芸術的発展は究極において経済的発展にもとづく。経済的発展の要求は、社会的機能としての教育を不可欠の条件として要求する。また逆に経済的発展から生ずる芸術的発展は、さらに土台であるその社会の経済的構造に反作用をおよぼすのである。そうしたなかで、教育と芸術とはどのような働きとして、どのような相互関係をもつのであろうか。この点について、レーニンの見解を検討してみよう。

### 1. 認識論=反映論

われわれはすでに、エンゲルスの所論に従って、人間が猿の段階から、いかにして人格としての人間の段階にまで発展してきたかを理解した。人類にこの進化を保障したものは人間が生きていくために不可欠の価値を生産する労働によってであった。労働を通して、人間は物的な客観的世界を認識することができた。この認識とそれにもとづく実験=労働によって科学が発達した。このプロセスを中核として世界を総合的に認識することによって、マルクス主義の哲学としての弁証法的唯物論が確認されたのである。

人間は始めから完全な精神として存在するのではなくて、動物的な不完全な状態から、弁証法的に発展するのである。何よりも、無知から科学的な知者にまで発達するのである。人間の発達にかかわる教育はまずこの点に着目しなければならない。

ひとたびわれわれが、「人間の認識は無知から発展するという観点に立つならば、」つぎのことを認めざるをえない。「すなわち、『物自体』は『われわれに対する物』に転化するということ、われわれの感覚器官が外部のあれこれの対象から刺激をうけると『現象』が発生するということ、また、われわれが存在していることを知っている対象が、なにかの障害でわれわれの感覚器官に働きかけることができなくなると、『現象』が消失するということ、を。」そこからくる唯一の必然的な結論は、「われわれのそとに、われわれから独立して、対象・物・物体が存在し、われわれの感覚は外界の像である。」とレーニンは主張する。これが弁証法的唯物論の立場に立つ認識論の出発点である。レーニンはマルクス・エンゲルスによって確立されたこの立場を守り、さらに発展させた。

「物質は第一次的なものである。」「物質がわれわれの感覚器官に作用して感覚を生み出すのである。」<sup>2)</sup> 感覚を始めとして、より高度な意識もすべて特殊な仕方では組織された物質の最高の所産なのであって、決してその逆ではない。そして感覚がわれわれのすべての認識(知識)の最初の源泉である。しかし認識が理解となるためには、知覚されなければならない。感覚がある事物の個々の特性の反映であるのに対して、知覚は、さまざまな特性をその総和において、それらの相互の関連においてとらえた反映である。知覚は感覚内容としての事物や現象のさまざまな特性や部分の総和における直観的・形象的な反映である。知覚のこの総体性という性格は、知覚される物質の対象の客観的な総体性にもとづいている。感覚も知覚もわれわれにおけるもっとも直接的な実在の反映である。しかし他のあらゆる認識過程と同様に、知覚する立体の特殊性によって左右される。感覚・知覚は客観的世界の主観的映像である。決して写真のような映像ではない。その認識内容が現実と合致しているかどうかは、まさに人間の実践活動によって点検される。<sup>3)</sup> 「人間の実践が唯物論的な認識論の正しさを証明する」<sup>4)</sup> のである。と同時に人間の実践活動は知覚の基礎でもある。何をどのように知覚するかは、その人が何をどのように行なうか、その人の実践活動の内容と性格がどうかによってきまってくる。知覚において認識された個々の現象の一般化、現実の一般化された反映が思考である。すでに持っている知識から問題を解決しようとする探求活動が思考活動である。現実の一般化された反映としての思考は、言語・コトバを通して行なわれる。思考はコトバを媒介とする現実の反映である。コトバは共通点をもった事物の信号である。コトバによってわれわれは、一般に知覚したり、表象したりすることのできないものでも、これを思考することができる。「表象は全体としての運動をとらえることができない。たとえば、毎秒30万キロメートルの速度をもつ運動はとらえられない。しかし思考はそれをとらえるし、またとらえるにちがいない。」<sup>5)</sup> かくして、感性的認識はコトバ(概念)を媒介にして理性的認識にまで発展するのであるが、抽象的思考は対象を、その総体において、その運動において、他の対象とのその関係において反映し、対象の本質を反映する。

概念はコトバによって表現されるが、それは事物そのものにおける実在的で一般的であるものの反映であり、実在世界の客観的諸関係の反映にほかならない。かかるコトバを媒介にして、諸事物の内部的結合、それらの相互作用、それらの発展法則を反映するようになる。それが思考過程である。思考は現象間の法則的・本質的関係の反映であるといえるであろう。現象の反映から本質の反映への移りゆきは、直接的なものから媒介的なものへ、特殊なものから一般的なものへの移りゆきである。人間は、思考過程において知覚の限界を越えるけれども、それは現実を歪めるものではなく、反対に、現実をより深く、より正確に認識させるのである。事物や現象のなかから一般的な

ものを明るみに出すことによって人間は、それらの本質を認識する。「思考が具体的なものから抽象的なものへ上昇するとき、——もしその思考が正しいものであれば……真理から遠ざかるのではなく、真理へ近づくのである。物質という抽象、自然法則という抽象、価値という抽象など、すべて科学的な(正しい、まともな、無意味でない)抽象は、自然をより深く、より正しく、より完全に反映する。生き生きとした直観から抽象的思考へ、そしてこれから実践へ、——これが真理の認識の、すなわち客観的実在の認識の弁証法的な道すじである。」<sup>6)</sup> 感覚・知覚におけると同様に、思考においても、実践はその源泉であり、かつその真理の基準である。われわれが解決を迫られる問題は、実践のなかで提起される。また逆に、有効な実践活動は、思考なしにはありえないのである。したがって、「生活・実践の観点が、認識論の第一の、根本的な観点でなければならない。」<sup>7)</sup> なぜなら、「認識は、それが人間に依存しない客観的な真理を反映したばあいだけに、生物学的に有用であり、人間の実践・生命の保存・種の保存に有用であることができる」<sup>8)</sup> からである。

## 2. 反映論にもとづく教育の問題

以上のレーニンの客観的世界の反映としての認識論から、教育の基本的問題が提起されなければならない。

第一に幼児期における感覚的経験の重要性が強調されなければならない。しかもそれは子どもの自然のなかでの行動による体験である。子どもたち同志の遊びにおける人間関係の体験である。幼児は事物をとりあつかうことによって、その個々の特性やさまざまな側面を識別する。自分の足で歩くことによって距離を識別する。事物の空間的知覚はかくしてえられるであろう。時間の知覚もまた意識的に行動することを通して「まえ」と「あと」との関連の知覚として、しだいに形成されるであろう。視覚や聴覚を始め、諸感覚の発達は、これを子どもの自然の形成にまかせておくのではなく、教育としては、とくに親や教師から、意図的に認識への刺戟を組織することが要請される。特に学校教育のなかでは目的志向的に、多面的・総合的に自然現象や社会現象を児童の前に提起し、観察させなければならないだろう。直観教授は唯物論的反映論に立てばこそ真に大切な教育原理となるであろう。さらに、さきに示したレーニンの認識論の第一観点からすれば、生物学的有用性からして、児童生徒の学習を生産労働と結合することは、もっとも重要な原則となるであろう。この点については後に改めて論ずるであろう。

いずれにしても子どもの科学的発達はもちろん、芸術的発達のためにも、視覚や聴覚の発達は不可欠の基盤である。すでにマルクスにおいて見たように、絵をかくことを通してこそ、自然界の色や形についてみて観ることを発達させる。歌を唄い、器楽を演奏することを通して、生活環境における音や、人間関係における声をきいてみることを発達させる。身体的活動を通して、スポーツや踊りを通して、身体的運動の感覚、リズム感覚を体験する。このように認識は物的世界の色や形、音や流れ、リズムを反映する。「感覚は運動する物質の像である。……感覚は、運動する物質のわれわれの感覚器官に対する作用によってひきおこされる。……赤い色の感覚は、1秒間に約450兆回の速さでおこなわれているエーテルの振動を反映している。淡青色の感覚は、1秒間にほぼ620兆回の速さのエーテルの振動を反映している。エーテルの振動は、われわれの光の感覚から独立に存在している。われわれの光の感覚は、人間の感覚器官に対するエーテルの振動の作用に依存している。」<sup>9)</sup> このように「唯物論は、客観的実在、すなわち運動する物質の、われわれの意識から独立した存在をみとめることによって、不可避免的に、時間と空間の客観的実在性をも……みとめなければならない。……空間と時間もまた単なる現象の形式ではなく、存在の客観的=実在的な形式である。世界には運動する物質以外の何ものもなく、そして運動する物質は、空間=時間のなか以外に

は運動することができない。」<sup>10)</sup>

感性的認識を、客観的世界の連続的総合的全体像の反映として、正しく育成することなしに、それにもとづいて始めてそのうえに形成される記憶・想像・思考という意識や感情・意志という人格の諸要素を育成し、発達させることはできない。このことと関連してつぎに強調せざるをえないことは、コトバのもつ概念内容の理解についてである。

コトバは、人間だけがもつ、もっとも完成したコミュニケーションの形態である。これがコミュニケーションの手段になりうるのは、すなわち人間間の相互理解を可能にするのは、人間が共通に理解せざるをえない客観的世界の事物や現象の信号であるからである。したがって、家庭においては親がこの点を意識して、客観的事物や現象と結合させて、子どもにコトバを教える努力が必要であり、学校においても、教師は、子どもたちがいわゆる「論語よみの論語知らず」にならないように、特に同様の留意が要請されるであろう。コトバなしに考え、感じることはできない。子どもたちが考え、感じ、そのうえで実践するその活動が、生物学的有用性をもちうるためには、コトバの意味内容が正しく客観的実在を反映する信号になっていなければならない。この点からも、わが国の教育遺産としての生活綴方的教育方法は再評価されねばならないであろう。

第三に、以上のことはさらに、子どもたちの知識はすべて客観的・科学的でなければならないということである。

客観的世界の反映としての唯物論的認識論に立つかぎり、知識が客観的であることは当然である。その見解を離れては、科学は一步も前進しえない。一般に認識は、形式としては主観的であるにしても、内容としては客観的でなければならない。認識主体の条件に左右される面からくる主観性のゆがみは、実践によって実証されることが必要であった。実践的に実証された知識であることによって、それは始めて真の知識といえる。このことは科学的であることを意味する。さらに、認識が感性的なものから理性的なものに発展してこそ、より正しく、より深い認識となるのであるが、その移りゆきを可能にするものは、コトバによって表現される概念を媒介にしてであった。しかもすでにふれたとおり、すべての概念は、その源泉としての感性的経験と結びついていなければならない。そのうえで概念は、現実の事物や現象の一般的・本質的特徴の反映であった。「概念は物質の最高の産物である脳髓の最高の所産である。」<sup>11)</sup> 感性的認識の資料の一般化を通じて形成された概念を操作する思考は、現実の一般化された反映であった。かかる思考によってえられた客観的世界の法則的知識の体系が科学である。「法則という概念は、人間が世界の過程の統一性・連関性・相互依存性および総体性を認識する諸段階の一つである」<sup>12)</sup> といわれるように、実践的に実証された知識といっても、それがまだ個々バラバラなものであるかぎり、真に科学的とはいえない。統一性・連関性・相互依存性および総体性があるはじめて科学的といえるものである。「人間のもっている概念は、抽象的で孤立しているばあいには、主観的であるが、全体・総計・傾向・源泉においては、客観的である」<sup>13)</sup> とレーニンが指摘したのもこの意味においてであろう。

最近のわが国のカリキュラムの改訂のなかで強調されてきているように、いかに科学的に高度化してきているとはいっても、その「科学」が、抽象的で孤立しているかぎり、全体的な連関性・相互依存性が否定されているかぎり、主観的ではあっても、真に科学的客観性のあるものとはなりえないであろう。人間をしあわせにする知識技能であり、よって社会の福祉に貢献できる知識技能であるためには、それは客観的・科学的でなければならない。教育課程が自然においても、社会においても、現実生活を正しく客観的に反映しているものでなければならず、全体的に相互連関性を保障するものでなければならないであろう。特に、たとえば小学校の八教科の横の連関性・一貫性が問われなければならない。

### 3. 反映論にもとづく芸術の問題

すでにみてきたことであるが、「認識は人間による自然の反映である。しかしそれは単純な、直接的な全体的な反映ではなくして、一連の抽象からなる過程であり、諸概念や諸法則などの定式化・形成からなる過程である。そしてこれらの概念や法則などもまた、たえず運動し発展しており、自然の普遍的な合法則性を条件的・近似的に包括するものである。人間は自然を全体的に完全に、すなわちその『直接的な総体性』を把握する=反映する=模写することはできない。人間は抽象や概念や法則や科学的な世界像などをつくりながら、たえずそれに接近していくにすぎない。」<sup>14)</sup>人間が自然について所有しようと努力している認識は、必然的に、たえず発展している歴史的過程である。なぜなら、第一に、反映される対象、物質世界が不断に運動状態にあり、発展状態にあるからであり、第二に、反映する方の主観は自然の一小部分にすぎず、したがって認識の運動はすべてに、すべての運動がそうであるように、つぎのような本源的な矛盾をもっているからである。すなわち、汲みつくしえない際限のない物質世界とわれわれの認識がそれぞれにもっている制限された性格とのあいだにある矛盾である。「認識とは、思考が客観へたえず、限りなく近づいていくことである。人間の思考のうちに自然を反映する活動は『生氣のない』『抽象的な』運動のない、矛盾のないものとして理解されてはならず、運動の不断の過程、矛盾の発生とその解決の不断の過程のうちにあるものとして理解されなければならない。」<sup>15)</sup>これが反映論の基本的命題であった。唯物論的認識論は、人間が現実反映の初歩的形態から、感覚的所与を論理的に仕上げることによって、科学的概念・法則・カテゴリー等の定式化にまで高まる過程を示している。認識が絶対的真理に迫っていく無限の過程であるということ、このことは芸術を含め社会的意識のあらゆる形態を正しく理解するうえで大きな意義をもつであろう。芸術といえども、それが真の文化として人類の進歩や福祉に貢献するものであるかぎり、この基準をはずれることはできない。

芸術的創造性とは何か。創造にかかわる認識的機能は想像である。「想像とは、形象・表象あるいは観念の形における新しいものの創造である。」<sup>16)</sup>想像はたしかに観念形態における新しいものの創造ではある。「しかし、想像の源泉となるものは、つねに客観的な現実である。人間によって創造されるものは、それがどのように新しいものであろうとも、つねに現実にあるものから出発し、それを拠所としている。……全く荒唐無稽な像が作られるときさえ、そのなかに含まれる個々のものは、客観的現実からとり出されたものであり、その反映である。」<sup>17)</sup>想像をも含めて、すべての認識がそうであるように、客観的現実の反映であればこそ、レーニンは想像の一種である空想についても、つぎのように述べている。「空想は、詩人だけに必要だと考えるのは間違っている。これは愚かな偏見だ。数学にさえ空想は必要である。空想なしには、微分や積分の発見さえ不可能であったろう。」<sup>18)</sup>革命という社会変革の活動であればこそ、夢なしには考えられない。空想は芸術家や詩人だけでなく、科学者にも不可欠のものである。いやしくも大胆な夢なくして、新しいものを創造することはできない。<sup>19)</sup>

想像は、労働の過程において発生し、発達した人間の特殊な活動である。したがってまた、人間がその願求を実現するために、目的志向的に、計画的に現実を変革しようとすれば、その意味で新たなものを創造する想像が有効であろうとすれば、その想像は客観的現実を正しく反映するものでなければならないのである。

さらに、レーニンの反映論的認識論は、世界の画像を創造することを助ける。「唯物論者にとっては、世界はその見えるままのものよりも、いっそう豊富で、いきいきとしていて、多様である。なぜなら、科学の発展の一步一步が世界のなかに新しい側面を発見するのであるから」<sup>20)</sup>というよ

うに、芸術的創造における想像は、個々の過程から切り離された外的なものの反映だけにかぎることにはできない。現実、目のなかにくつる個々の特徴の、機械的な全体ではなく、その複雑な諸関係、諸矛盾、諸葛藤をもち、古いものと新しいものとが闘争し、だれもが明らかにできるとはかぎらない、内部的な動態をもった、一定の法則にもとづいて発展している生きた世界であるが、芸術はそうした現実世界のなかから、一般的なもの、典型的なもの、諸現象の連関、それらの本質的な内容を認識することを助ける。

芸術的認識は、「現実の形象的反映である。」<sup>21)</sup> 社会科学が社会的現実の構成を抽象的概念によって理論的に認識するとすれば、芸術は社会的現実の生活形態を形象によって具体的に認識する。芸術的認識は、芸術家の体験を基礎とした社会的現実の生活形態の形象的認識である。<sup>22)</sup> 科学が一般に論理的形式・カテゴリーによるのに対して、形象によって具体的に認識するところに芸術的認識の特殊性がある。レーニン、トルストイ、ネラーソフ、シチェドリン、ゴーリキーを、まさに真実性のために、芸術的諸形象が、そのふかい具体的な理解における歴史的現実に対応していることのために、典型化が完全であると評価したのである。偉大な芸術家は、その時代が提起する問題を避けることはできず、時代の本質的な特徴と現象を描出せざるをえない。芸術家の偉大さをはかる基準は、現実の本質的な面を認識するその深さにある。なぜなら、ほんとうの芸術作品にはかならず客観的真実がふくまれているからである。

現実の芸術的反映の真実性の度合いは何によってきめられるであろうか。それは、どの程度に、芸術家が諸現象の合法的連関をみぬいているかによって、現実の本質的な側面と内容を認識するその深さによって決められる。したがって芸術家の世界観は、芸術作品が芸術的に十分な価値をもつための基礎である。偉大な芸術作品であればこそ、そこから作者の世界観がにじみ出てくるであろう。「生きた人間ならだれでも、いずれかの階級の味方をしないではいられないし、(ひとたびかれが、それらの階級の相互関係を理解するなら) その階級の成功を喜ばないではいられないし、その階級の失敗を悲しまないではいられないし、その階級に敵意をいだく人びとや、おくれた見解を普及させてその階級の発展を妨げる人びとに対して、憤りをおぼえないではいられない等々」<sup>23)</sup> とレーニンはいう。芸術が、彼のいう偉大なものであればこそ、それはおのずから階級性をもたざるをえないゆえんである。

#### 4. 芸術の階級性・党派性

そもそも「唯物論者は階級的矛盾を暴露するとともに、そのことによって自己の見地を確立する」<sup>24)</sup> ものである。「唯物論は党派性とでもいうべきものを自己のなかにもっており、諸事件のどのような評価にあたって、直接、かつ公然と特定の社会的集団の見地に立つことを義務づける」<sup>24)</sup> という性格をもっているのである。ここに、芸術的創造もまた、それが本物であればこそ、階級的性格をもたざるをえない必然性がある。

資本主義社会にあっては、文筆の仕事をはじめとして一般に芸術活動は、総じてプロレタリアの共通の事業から独立した個人的な仕事であってはならない。それは「全プロレタリアの事業の一部、全労働者階級の自覚した前衛全体によって運転される一つの単一の、偉大な社会民主主義的な機械装置の『歯車とねじ』にならなければならない」<sup>25)</sup> のであり、「組織的、計画的な、統一された社会主義的党活動の一構成部分とならなければならない」<sup>25)</sup> のである。だから「無党派的文筆家をほうむれ、超人文筆家をほうむれ」とレーニンは叫ぶ。なぜなら、資本主義社会に、すなわち金力のうえにたてられている社会に、勤労大衆が貧窮し、一握りの金持が寄生している社会に、真の、現実の「自由」はありえないのであり、「社会で生活しながら、社会から自由であることはで

きない」<sup>26)</sup>からである。「だれのものでもない感覚、だれのものでもない心理、だれのものでもない意志、もし人間の意識が客観的に実在する外界を反映するという唯物論の理論をみとめなければ、不可避的にここ(観念論の信仰主義)までに転落せざるをえない」<sup>27)</sup>であろうし、「すべての党派のうちで、もっともいとうべきものは中間の党派である」というJ・ディーツゲンの言葉を引いて、あらゆる問題について唯物論的方向と観念論的方向とからのがれようとする試みは、「和解的な山師ぎた! 以外のなにものでもない」<sup>28)</sup>とレーニンは指摘する。無関心というのは、中立性とか、闘争から身をひくということの意味しない。階級社会である資本主義社会にあっては、闘争から「身をひくこと」はできないし、中立者はありえないからである。無関心ということは、結局するところ「強者、支配者に対する暗黙の支持」<sup>29)</sup>にはかならない。「無党派主義はブルジョア思想であり、党派性は社会主義思想である、という命題は、大体において、ブルジョア社会全体にあてはまる」<sup>29)</sup>したがって、レーニンの考えからすれば、「芸術のための芸術」というのは、芸術の階級性をごまかすための偽善にすぎないのである。芸術家が真に自由であるためには、まず外的には農奴制的検閲からの解放、金銭・小商人根性・買い手やパトロンからの解放と同時に、内的には、芸術から確かな社会的基盤と現実の豊かさ、内容の重要性を奪いとる。無政府主義的な個人主義と恣意からの解放が必要である。そして積極的には、プロレタリア階級の立場をしっかりとふまえることが必要である。そのときにこそ、芸術は真に芸術としての力を発揮することができるのである。なぜなら、レーニンに従えば、勤労大衆こそが歴史の真の創造者、社会のすべての精神のおよび物質的価値の創造者なのであるから。「芸術は人民のものだ。芸術はこの大衆に理解され、かつ愛されねばならない。芸術はこの大衆の感情・思想・意志を統一し、それらを高揚せねばならない。芸術はかれらのうちに芸術家をめざめさせ、発達させるべきである」<sup>30)</sup> 芸術は本来そうした性格のものだからである。芸術は本来人民のものであるがゆえに、大衆にふれ、大衆を高めるものであり、大衆に必要とされるものであり、大衆の意識に深い痕跡をのこすものでなければならぬ。ここに芸術の深い教育的意義がある。

## 5. 教育の階級性・党派性

マルクスの社会の発展に対する科学的認識は、商品の分析から剰余価値の秘密を発見した。すべて存在するものの発展は、矛盾にもとづいて作用する対立物の闘争であるように、社会の発展は生産力と生産関係の矛盾によるのであるが、資本主義社会にあっては、生産の社会的所有と取得の私的所有の形態との矛盾を基本とする。剰余価値追求から必然的に発生する搾取関係によるブルジョアジーとプロレタリアートの対立が資本主義社会の主要な矛盾である。レーニンはマルクス主義のこの理論を、歴史的に発展した帝国主義段階においていっそう発展させることができた。資本主義の高度に発展したこの段階においては、その矛盾もまた飛躍的に強まり、芸術にもまして、教育の領域においてはいっそう支配と被支配の階級の性格を顕著にせざるをえない。レーニンは彼の時代の学校教育の実際や計画案を分析することによって、教育がいかに階級性をもたざるをえないものになっているかを具体的に立証した。彼は1910年度の「ロシヤ年鑑」(内務省出版)を分析しながら、学齢児童は22%なのに、在学者は4・7%つまりそのほとんど5分の1にすぎない。したがってロシヤにおける児童と未成年者のおよそ5分の4が国民教育をこぼまれていることを意味する。「人民大衆が教育・光明・知識という点でこれほどの略奪をうけている野蛮国」、こういう国はヨーロッパではロシヤ以外に一つも残っていない、といい、「若い世代の5分の4は、ロシヤの農奴制的国家機構によって文盲となる運命を負わされている」<sup>31)</sup>ものであるから、「お役所的国民愚昧化」であり、教育省は「ロシヤの愚昧化省」であると糾弾している。さらに、ツァーリの政府は、ロシ



ヤは貧乏だからといって、全住民の一人あたり1ルーブルにもみたくない教育予算しか支出しないのに、「高い」官職をつとめあげた地主へは何万ルーブルという俸給を呈している。たしかに「小学校教師の給料に関するかぎり、ロシアは貧乏である。」「国民教育に関するかぎり、ロシアはただの貧乏ではなくて、赤貧なのだ。」<sup>32)</sup> そのくせ人民弾圧のための警察や、侵略戦争のための軍事的冒険にはおしみなく金をだして「すこぶる金持」<sup>32)</sup>なのである。だから「政府はロシアの国民教育を妨害している。政府はロシアの国民教育の最大の敵だ」<sup>33)</sup>と指摘する。さらにまた政府は、小市民や農民が人口の88%、すなわちおおよそ国民の10分の9をしめているにもかかわらず、彼らに対し教育の道をとどし、貴族は人口のたった1%半なのに、「学校やあらゆる種類の教育施設のために国民の10分の9から金をとりあげ、小市民と農民には道をとどしおきながら、しかもこの金で貴族を教育している」<sup>34)</sup>と政府を糾弾している。

資本主義社会では、学校が身分にかかわりなしに開放されているとしても、授業料の支払いという「ただ一つのことだけを要求している」<sup>35)</sup>かぎり、その学校は階級学校である。労働者階級は子どものための無償教育を要求する。子どもによい教育をほどこすことができるのは金持階級だけという社会にあっては、「すべての子どものための無償の義務教育だけがせめていくぶんでも、今日の無知から人民を救い出すことができる。」<sup>36)</sup>とはいえ、それはせめていくぶんでもであって、それ以上ではない。だからこそ「現代社会では、授業料を全然とらないような中等学校といえども、なんら階級の学校でなくなることは決してない。なぜなら、7～8年にわたる生徒の扶養費は授業料よりもはるかに高く、こうした費用がまかなえるのは、ごくわずかの少数者にすぎないからであり」<sup>37)</sup>資本主義社会であるかぎり、「西欧でもロシアでも中等学校はその本質において階級的であり、またそれは住民中のごくごく少部分の利益だけに奉仕しているからである。」<sup>37)</sup>たとえ無料の学校教育があらゆる階級の子どもたちに開放されていても、資本主義的経営においては、特に農業経営においては、「農民は自分の身体をすりへらすまで働き、自分の子どもたちを二倍もはげしく働かさなければ持ちこたえることができない」のであり、農繁期においては特に「彼らは自分自身の子どもの労働にいろいろと重荷をかけなければならないのである。」<sup>38)</sup>このように、児童労働を搾取せざるをえないような生活条件に、労働者や農民をおとしめているかぎり、その教育の開放性を子どもに利用させることのできるのは有産者だけとならざるをえない。

資本主義社会の発展につれて、矛盾がきびしくなればなるほど、学校もまた基本的に対立する両階級の外に立ったり、中立であったりすることは許されない。しかしだからこそブルジョア国家が文化的であればあるほど、その国家はますます巧妙にうそをついて、学校というものが政治の外に立ち、社会全体に奉仕することができると主張してきた。しかし実際には、学校はブルジョア階級の階級的支配の道具に完全になりはてていたのであり、「忠勤をはげむ奴僕と、ものわりのよい労働者とを資本家に提供することを目的としていた」<sup>39)</sup>のである。彼らは「知識を自分の独占物とみなし、それをばいやる『下層民』に対する自分の支配の道具にしている」<sup>40)</sup>のである。したがって「生活からはなれ、政治からはなれた学校なるものは、偽りであり、偽善である」<sup>39)</sup>とレーニンは公然と声明する。学校が政治の外に立つことができるかのようにいう見解はブルジョアの偽善である。ブルジョア階級は学校教育の中立性という命題を提出しておきながら「自分では、学校事業の重点をそのブルジョアの政治におき、ブルジョア階級のための従順ですばしこい召使を仕込むということに、学校事業を帰着させよう」とつとめ、普通教育さえ、これを下から上まで、ブルジョア階級のために従順ですばしこい従僕、資本の意志の執行者、資本の奴隷を仕込むことに帰着させよう」とつとめてきたのであって、学校を人間の人格を育成する道具とならせるために配慮したためは、ただの一度もないのである。<sup>41)</sup>レーニンのこの指摘は、高度に発達した資本主義国として

の戦後のわが国においても見事にあてはまるのではなからうか。

大十月革命を成功させたソ連邦の勤労大衆にとって、知識は解放のための彼らの闘いの道具であること、彼らの失敗の理由が教育の不足にあること、教育をすべての人びとが実際に手に入れることのできるものとするかどうかは、いまや自分たち自身にかかっていることを理解し、自分たちのすすめている闘争を勝利におわらせるためには、教育がどんなに必要であるかを知ったのである。

## 6. 文化の民族的性格に関する問題

教育や芸術の階級性・党派性と関連して、諸民族の牢獄といわれたツァーリ・ロシアでは、第一次世界大戦の前夜にあって、軍備競争が激化し、排外主義の風潮が一般化していた。そして一方では排外主義が支配的大ロシア民族の特権を保障し、他のすべての民族を従属、不平等、無権利の状態におこうとする反動的民族主義が、他方では民族文化、民族的排他性をもって民族を離間させるブルジョアの民族主義およびブルジョア民主主義的民族主義がはびこっていた。ここから第一に、ブルジョア民族主義者やえせマルクス主義者たちは「まずはじめに民族的任務、それからプロレタリア的任務だ」と言う。これに対してレーニンは「まず第一にプロレタリア的任務だ」と主張する。なぜなら、それが「民主主義の利益を保障する」<sup>42)</sup>からであり、プロレタリア国際主義、プロレタリアートの歴史的任務の観点から民族問題をとりあつかうべきだからである。「プロレタリアートに奉仕しようとするものは、『自国の』ブルジョア民族主義に対しても、他国のブルジョア民族主義に対しても、うむことなく闘争し、あらゆる民族の労働者を統一しなければならない。…われわれのなすべきことは、まさにわれわれの民主主義運動と労働運動の歴史のうちにある萌芽を、もっぱら国際主義の精神に立って、また他国の労働者ともっとも緊密に同盟してこれを発展させながら、ブルジョア的な支配の民族文化とたたかうことである。」<sup>43)</sup> おのおのの民族文化のなかには「ブルジョア的文化の思想」と「民主主義と社会主義の思想」がある。「マルクス主義者は、第一の種類の『文化』と闘いながら、つねに第二の文化を区別」<sup>44)</sup>しなければならないとレーニンはいう。

ところが帝政ロシアの学校における「民族文化」の内容は決して国際主義的ではなかった。だからこそレーニンはこの「民族文化」とたたかわねばならなかった。「あらゆる資本主義社会における重大な階級闘争は、なによりもまず経済と政治の領域でおこなわれる。」<sup>45)</sup> だから、「民族内部の階級闘争からあらゆる副次的考慮をとりさって純粋にするというとき、これは、あきらかに、こっけいな詭弁であり……この領域から学校の領域を分離させることは、第一に、ばかげたユートピアである。」<sup>45)</sup> なぜなら、芸術を含めて「民族文化」一般と同様に、学校を経済と政治から切り離すことはできない。学校事業等は「いわば社会生活のもっともイデオロギー的な分野」であり、いわゆる「純粋の」民族文化もしくは教権主義と排外主義との民族的培養がもっとも容易におこなわれる分野である。したがって経済的・政治的生活から、そういう「学校事業等を分離させることこそ、『純粋の』教権主義と『純粋の』ブルジョア排外主義を温存し、激化し、強化するだろうからである。」<sup>46)</sup> このゆえに、教育において培養し、育成せねばならないのは、民族的文化であっていわゆる「純粋の民族文化」であってはならない。「民族文化のスローガンの意義は、その国と世界のすべての階級の客観的な相互関係によってきまるのである。」<sup>49)</sup> その相互関係が排他的・差別的であってはならない。それは民主主義的・国際主義的でなければならない。「他民族を抑圧している民族は自由ではありえない」というエンゲルスの言葉を引用しながら、「自分の奴隷的地位を正当化し美化する奴隷(たとえば、ポーランドやウクライナなどの首をしめることを、大ロシア人の『祖国防衛』などとよぶような)、このような奴隷は、当然の憤りと軽蔑と嫌悪の情をよびおこさせ

る下司であり下郎である」<sup>47)</sup>と非難しながら、真の民族的誇りというものは、「平等の人間の原則のうえにうちたてるところの、自由で独立的な、自主的で、民主主義的で、共和主義的な」<sup>48)</sup>民族のものであることを教えている。この観点からして、戦前のわが国の朝鮮民族に対する教育的・文化的政策、すなわち「一視同仁」という「同化」政策や戦後の崇米思想とアメリカによる日本のアメリカ化的傾向にもとづく文化的・教育的政策が問題にならないかどうか。現在のわが国の文化・教育の問題を考える場合に、この問題を避けて通ることはできないであろう。

おのおのの民族のなかには、資本主義社会であるかぎり、ブルジョア文化があり、単に諸要素としてではなく、支配的な要素としてある。しかし、それとともに勤労被搾取大衆がいて、彼らの生活条件が不可避的に民主主義的イデオロギーと社会主義的イデオロギーをうみ出す。したがって「おのおのの民族文化のなかには、たとえ未発達なものであるとはいえ、民主主義的文化と社会主義的文化との諸要素がある。……われわれは、おのおのの民族文化のなかから、その民主主義的要素と社会主義的要素だけをとりあげる」<sup>49)</sup>のだ。そうした文化こそ民族的文化である。なおこの場合、補足していえば、マルクス主義者の仕事は、民族をへだてるのではなく、あらゆる民族の労働者を団結させることであり、「われわれの旗のうえにかかっているのは、『民族文化』ではなく……国際文化である」<sup>50)</sup>とレーニンは強調するが、その「国際文化は無民族的なものではない」<sup>49)</sup>ということである。それは国際文化の精神に立った、民族間の民主主義的・社会主義的要素からなる个性的文化にほかならない。決していわゆる「純粋な」無国籍的文化ではないし、あってはならない。この意味において、わが国の最近の文教政策における民族主義的強調は大いに警戒されねばならないと同時に、「純粋な」芸術、どこの国のものともわからない無民族的な芸術文化は批判されなければならない。

## 7. 共産主義的教育と芸術のリアリズム

帝政ロシアを打倒して、共産主義建設に向って新しい国づくりに第一歩を踏み出した1920年10月レーニンは共産青年同盟第三回全ロシア大会において、共産主義建設のための青年の任務を明らかにした。そのなかで何よりもまず「その任務とは、学ぶ、ということである」<sup>51)</sup>と強調する。共産主義を希求するすべての青年は、「総じて、共産主義を学ばなければならない。」<sup>52)</sup>しかし、共産主義やプロレタリア文化は、どこからとも知れず飛び出してきたものではない。マルクス主義の創始者たちは、人間社会の発展法則を研究して、資本主義の発展が不可避的に共産主義をもたらすことを理解した。彼らによるそのマルクス主義は「共産主義が人間の知識の総和から現われたことをしめす手本」<sup>53)</sup>である。したがって、青年の学習、教育、教養は、古い社会が残してくれた材料から出発しなければならない。古い社会が残してくれた知識・組織・施設の総和により、古い社会が残してくれた人力と資材の蓄えを用いてのみ、はじめて共産主義を建設することができるのである。しかし古い資本主義社会が残した実害や災害もあるが、そのなかでもっとも大きなものの一つは「本と生活の実際とがまったく食いちがっていること」<sup>54)</sup>である。だから、共産主義を学ぶ場合、特に留意しなければならないことは、「理論と実践との結合」すなわち、演説や論文からえた理論は、各方面の日常活動や闘争と関連させ、それによって点検しながら、習得することである。<sup>55)</sup>それなしに、ただ書物のうえでの共産主義の知識は、三文の値うちもない。共産主義という未来社会の理想は、「生産労働を伴わない教育と教養も、教育と教養を平行的に伴わない生産労働も、現代の技術水準と科学知識の状態とが要請するような高さに達することはできない」<sup>56)</sup>という点にある。また、教育は政治的に中立ではありえない。政治・経済から分離させた教育は偽善である。それはつねに現実生活、特に階級闘争と結合していなければならない。しかしだからといって「まだ

年少な成長中の世代の頭に、つたないやり方で、この政治を持ち込もうとする誤りと試みはこれまでもあったし、いまでもよくみられる」が、「基本原則のこのような乱暴な適用に対して、われわれがつねに闘わねばならないことは、疑いをいれない」<sup>41)</sup> ことである。人類の全発展によって作り出された文化についての正確な知識をもつときにだけ、古いもののなかから、現在の課題解決に必要な、たたかいに有利な、共産主義建設に役立つものをえらび出し、よってもって古いものをつくりかえるときにのみ、プロレタリア文化を建設することができるのである。「人類が作り出したすべての豊富な知識で自分の意識を豊かにするときにはじめて、共産主義者となることができるのである。」<sup>57)</sup> このさい特に必要なものは、科学の最新の成果に従ってきずかれた、現代的な基礎＝電化である。

つぎに青年同盟の任務として問題になるのは、共産主義的道德である。それは「同盟自身の実践活動を組織すること」<sup>58)</sup> 「仕事への協力を組織すること」<sup>59)</sup> である。これはまったくプロレタリアートの階級闘争の利益に従属するものである。たたかいに勝つための不可欠の要求は団結であり、自覚的規律である。共産主義、特にそのモラルは、プロレタリアと勤労者とのたえまない闘争に結びつけられてこそ、はじめてそれを学ぶことができる。

以上のことから、レーニンが教育に要求していることは、人類の文化遺産である科学の知識・技術の総合的基礎と実践活動を組織する能力、闘いに勝利するための団結、自覚的規律であることが理解されるであろう。しかもその教育の対象はどこまでも働く人民大衆である。人民が国の主人であり、なければならない社会主義国家では、当然のことながら文化は大衆のものである。レーニンはロシア文化を、トルストイ、チェルヌシエフスキーあるいはゴロキーの水準によってではなく、大衆の文盲の事実によって性格づけ、大衆の文化水準の向上をこそ問題にしたのである。<sup>60)</sup> レーニンは大衆性を卑俗性から区別してつぎのようにいう。「大衆的な作家というものは、非常に簡単な、一般によく知られた材料から出発して、簡単な考察か、うまく選んだ実例の助けをかりて、それらの材料から主要な結論を出して、ものを考える読者をつぎつぎとそのさきの問題に突き当らせながら、読者を深い思想へ、深い学説へと導いていくのである。……彼は未熟な読者のなかにひそむ、頭を働かせようという真剣な意向を相手にしており、読者がこの真剣で骨の折れる仕事をするのを助け、読者が第一歩を踏み出すのを助けながら、それからさき自主的に進んでいくように教えながら、読者を導いていくのである。」<sup>61)</sup> この前半ではまさにリアリズムの芸術の正しい機能が、後半では共産主義教育の正しい機能が示されている。これに対して「俗流著作者はものを考えない読者、また考える能力のない読者を相手にする」<sup>61)</sup> のである。

科学的知識・技術の総合的基礎の教育についてはどうか。レーニンの草稿「総合技術教育について」によれば、「すべての人が、指物工、鉄工等々に、しかも最低限度の一般教育と総合技術教育をつけ加えたそれに、ならなければならない。」<sup>62)</sup> 表面的には「手工業者」であるが、単なる職人的技術者なのではなくて、「広い一般教養をもっているように」ならなければならないのであり、それは「科学の基礎原理の最少必要量を知っているように」「総合技術的な視野と総合技術教育の基礎原理(初歩)をもっているように」<sup>63)</sup> と要求される内容のものである。さらに総合技術教育の原則的意義からして、「マルクスに従って、わがロシア共産党の綱領に従って」<sup>64)</sup> ……共産主義者であるように」<sup>63)</sup> と要求される。つまり、その教育には階級性が裏づけられているのである。

このように、階級性に立った、広い一般教養と科学的な知識と技術の基礎を総合した教育内容は人格形成の内容であるかぎり、統一的に身につけられなければならない。そのためにこそ、実践を通しての吸収が必要なのであるが、レーニンは同時により一般的に重要な原則として、プロレタリア革命の主要な任務を「組織者的な任務」「長期の教育と再教育の組織活動という課題」「数千

万、数億の人びとを組織するという任務」「労働の組織化と教授の仕事を結合」する任務として提起している。<sup>65)</sup> これは前述した道徳的側面でもあるが、内容に対する形式、組織的側面として、科学的な総合技術教育と統一的に理解されなければならない。

なおこの点に関連して補足すれば、レーニンはツァーリの軍隊を批判しながら、近代的な科学技術と民主的・近代的組織が、またソ連赤軍の経験からしても、ブルジョアのあらゆる文化、知識および技術が、共産主義建設に不可欠であることを教えている。<sup>66)</sup>

かかる科学的客観性にもとづく総合に対して、宗教的な神の観念で対立矛盾や多岐性を統一しようとする考えを、レーニンはきびしく批判する。すなわち、あらゆる「神は腐敗」であり、「人間の愚鈍なおさえつけられた状態、外的自然と階級的抑圧とによって生み出された観念、このおさえつけられた状態を固定させ、階級闘争を眠りこませる観念の複合体」であること、神の観念は、支配者が「人民を奴隷状態に保っておくのを助ける」もの、「生けるものを死せるものにすりかえることによって、いつでも『社会的感情』を眠りこませ、にぶらせ」るものであった。<sup>67)</sup> このようにレーニンは「宗教は民衆の阿片である」というマルクスの名言（「ヘーゲル法哲学批判序説」）を受けつぎ、「現代のすべての宗教と教会、あらゆる宗教団体は、労働者階級の搾取を擁護し、彼らを麻酔させる役をするブルジョア反動の機関である」<sup>68)</sup>と糾弾している。いまわが国の教育内容や道徳教育を裏づけている「期待される人間像」はこの立場から批判されなければならないであろう。

文盲の国といわれたロシアの人民大衆に、ブルジョアジーから受けついで知識の総和を身につけさせ、うそや偏見に打ちかつ能力をもった真の共産主義者に育成するためには、「生活のあらゆる領域での生き生きとした、具体的な実例や模範によって大衆を教育」<sup>69)</sup>しなければならない。「大衆を再教育することができるのは、扇動と宣伝だけである。」ここに扇動家・宣伝家としての教育者や芸術家の活動上の重要な任務があると指摘する。<sup>70)</sup> この点からレーニンの具体的な指摘を例示すれば、一つは、ロシア革命の鏡としてのレフ・トルストイである。トルストイのなかには一面、もっともいまわしいものの一つである「悪に抵抗するな」という宗教の説教があるが、他面では、「資本主義的搾取の仮借のない批判、政府の暴力、裁判と国家行政の茶番劇の暴露、富の増大や文明の成果と労働者大衆の貧困、野性化および苦悩の増大との間のきわめて深刻な矛盾の暴露」という点では「このうえなききびしいリアリズム」があると高く評価している。<sup>71)</sup> また有名なプロレタリアの歌『インタナショナル』をつくったフランスの労働者詩人ウジェーヌ・ポティエについては、彼の詩はおくれた人びとの意識を目ざめさせ、労働者に統一を呼びかけ、フランスのブルジョアジーとその政治を鞭打ったし、コミュニンの思想を全世界に広めた。彼は歌によるもっとも偉大な宣伝家の一人であった、と評価した。また音楽としての『インタナショナル』については「自覚した労働者がどの国にやってくるように、運命が彼をどこに連れていこうと、祖国から遠くはなれて、言葉も通ぜず、知合いもなく自分をどんなに他人人だと感じていようと、彼は『インタナショナル』の熟知した旋律によって、自分の同志と友とを見つけることができるであろう」という。<sup>72)</sup>

教育にしても、芸術にしても、それが正しく有効に機能し、社会生活に実り豊かな影響を与えるもっとも重要な条件は、その思想性と人民性、勤労者大衆の闘争との結合にあった。レーニンの考えに従えば、芸術家も教育者も、真に自由であるためには、社会主義のための闘争に参加することであり、人民に奉仕することであった。学校が真に人間の人格を育成する機関になるように配慮しうるのは、芸術的創造の真の自由が保障されるのは、階級的隷属からも、社会的不正からも、民族的抑圧からも、経済的恐慌からも、失業や貧乏からも、古い偏見の抑圧からも自由となった社会主義社会においてだけだからである。教育はすべて共産主義建設のための人間づくりに向けられる。それによって文化的水準を高めることなしに、芸術を人民のものとすることはできない。芸術もま

た広く大衆にふれ、彼らの心に深い痕跡を残すものとならなければならない。芸術と教育は相互に助けあい補いあいながら、あらゆる進歩的なもの、創造的なもの、民主的なものを支持し、誠実で大胆な勢力に依拠し、これらの勢力のおくれた、誤り傾向を克服するのを助けなければならない。

あらゆる国の社会主義者をマルクス主義にひきつけている打ちかちがたい魅力は、まさにこの理論が「厳密な、最高の科学性と革命性とを結合していることにある」<sup>73)</sup>とレーニンはいうが、最高の科学性と革命性とを総合統一した価値であればこそ、すべての人びとを打ちかちがたくひきつけるのであり、その魅力こそまさに美ではなからうか。

## (註)

- 1) ソ同盟共産党中央委員会付属マルクス=エンゲルス=レーニン研究所編集『レーニン全集』第四版, T. 14. СТР. 91. 以下『レーニン全集』第四版については、巻とページのみを示す。
- 2) T. 14. СТР. 43.
- 3) 認識論における実践の規準性については、レーニンも「唯物論と経験批判論」で指摘しているように (T. 14. СТР. 125. マルクスは1848年、「フォイエルバッハに関する第二のテーゼ」で、エンゲルスはその後「フォイエルバッハ論」(1888年)で明らかにしている。
- 4) T. 14. СТР. 126.
- 5) T. 38. СТР. 220.
- 6) T. 38. СТР. 161.
- 7) T. 14. СТР. 130.
- 8) T. 14. СТР. 126.
- 9) T. 14. СТР. 288.
- 10) T. 14. СТР. 162.
- 11) T. 38. СТР. 157.
- 12) T. 38. СТР. 140.
- 13) T. 38. СТР. 199.
- 14) T. 38. СТР. 173.
- 15) T. 38. СТР. 186.
- 16) ソ連邦教育科学アカデミヤ心理学研究所、スミルノフ主監「心理学」第二版, 1962年, СТР. 334.
- 17) 同上, СТР. 335.
- 18) T. 33. СТР. 284.
- 19) レーニン「何をなすべきか」T. 5. СТР. 476. 参照。
- 20) T. 14. СТР. 116.
- 21) 前提「心理学」, СТР. 35.
- 22) 伊東勉著「リアリズム入門」理論社, 1969年, 100, 103ページ, 参照。
- 23) T. 2. СТР. 498, 499.
- 24) T. 1. СТР. 380, 381.
- 25) T. 10. СТР. 27.
- 26) T. 10. СТР. 30.
- 27) T. 14. СТР. 331.
- 28) T. 14. СТР. 325.
- 29) T. 10. СТР. 61.
- 30) 蔵原・高橋編訳, 「レーニン・文化・文学・芸術論」, 大月書店, 1969年, 下巻, 1194ページ, クララ・ツェトキンの思い出から。
- 31) T. 19. СТР. 115.
- 32) T. 19. СТР. 117.
- 33) T. 19. СТР. 119.
- 34) T. 19. СТР. 121.
- 35) T. 2. СТР. 422.
- 36) T. 6. СТР. 365.
- 37) T. 2. СТР. 432, 433.
- 38) T. 19. СТР. 184.
- 39) T. 28. СТР. 68.

- 40) T. 28. CTP. 69.
- 41) T. 28. CTP. 386.
- 42) T. 20. CTP. 15.
- 43) T. 20. CTP. 9.
- 44) T. 20. CTP. 16.
- 45) T. 20. CTP. 19.
- 46) T. 20. CTP. 20.
- 47) T. 21. CTP. 56.
- 48) T. 21. CTP. 86.
- 49) T. 20. CTP. 8.
- 50) T. 19. CTP. 498.
- 51) T. 31. CTP. 259. 「量より質のよいものを」では、第一に、第二に、第三にも、学ぶことを指摘している (T. 33. CTP. 447).
- 52) T. 31. CTP. 259.
- 53) T. 31. CTP. 261.
- 54) T. 31. CTP. 260.
- 55) 「量より質のよいものを」では、「科学が死んだ文学や流行の空文句に終わらないように、また科学が真に血となり、完全な未来の姿で日常生活の構成要素となるように、これを点検することである」と注意している (T. 33. CTP. 447).
- 56) T. 2. CTP. 440.
- 57) T. 31. CTP. 262.
- 58) T. 31. CTP. 266.
- 59) T. 31. CTP. 273.
- 60) ソ連邦科学アカデミヤ哲学研究所、「哲学の諸問題」1970年10月号, CTP. 17. 参照.
- 61) T. 5. CTP. 285.
- 62) T. 36. CTP. 491.
- 63) T. 36. CTP. 492.
- 64) T. 36. CTP. 490.
- 65) T. 29. CTP. 141, 142, 310, T. 30. CTP. 351.
- 66) T. 8. CTP. 35, T. 30. CTP. 403, 参照.
- 67) T. 35. CTP. 89, 93.
- 68) T. 15. CTP. 371, 372.
- 69) T. 28. CTP. 80.
- 70) T. 31. CTP. 347, 348.
- 71) T. 15. CTP. 180.
- 72) T. 36. CTP. 187, 188.
- 73) T. 1. CTP. 308.